



Title	<翻訳> イクバル・ウルドゥー詩集(Ⅰ)
Author(s)	Iqbāl, Muḥammad; 松村, 耕光
Citation	大阪外国語大学学報. 1984, 64, p. 415-435
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80991
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イクバル・ウルドゥー詩集 (I)

松 村 耕 光

Selected Urdu Poems of Iqbal (I)

Takamitsu MATSUMURA

訳 者 序

ムハンマド・イクバル (Muhammad Iqbal, 1877-1938) は近代インドを代表するムスリム詩人の一人であり、ウルドゥー語とペルシア語で数多くの優れた詩を発表し、パキスタンでは詩聖と仰がれている。また、哲学者・政治家としても非常に有名である。

今後イクバルの代表的なウルドゥー詩を翻訳・紹介してゆきたいと考えるが、本稿では、初期からのウルドゥー詩を収めた詩集『隊商出発の合図』(Bāng-e Darā, 1924) の中から次の7篇を選んで訳出した。

1. 苦しみの姿 Taṣvīr-e dard
1904年4月、イスラーム擁護協会 (Anjuman-e Ḥimāyat-e Islām) の年次大会で発表。
2. インドの歌 Tarānah-e Hindī
1904年10月、「我々の国」(Hamārā des) という題で雑誌『宝庫』(Makhzan) に掲載。
3. 新しい寺 Nayā Shiwālah
1905年3月、雑誌『宝庫』に掲載。
4. ムスリムの歌 Tarānah-e millī
発表年月・場所ともに不詳。
5. ナショナリズム (ひとつの政治概念としての祖国) Waṭāniyat (ya'nī waṭan ba-ḥaithiyat ek siyāsī taṣawwur ke)
発表年月・場所ともに不詳。
6. 蠟燭と詩人 Sham' aur shā'ir
1912年4月、イスラーム擁護協会の年次大会で発表。
7. イスラームの夜明け Tulū'-e Islām
1923年4月、イスラーム擁護協会の年次大会で発表。

1 から 3 まではインド・ナショナリストであった時期の傑作であり、残りの 4 篇は、ヨーロッパ留学（1905～1908）を機にインド・ナショナリズムから脱却し、人類統一の理念を掲げるイスラームの観点に立ってナショナリズムそのものを批判するようになってからの代表的作品である。

訳

苦しみの姿

私の話は耳など寄せつけない。

沈黙が語り手、無言が私の言葉。

口を閉ざすのがおまえの宴のきまりなのか？

私は話したくて仕方がないのに。

チューリップが、水仙が、薔薇が拾い上げた、

花園一面に飛び散った私の物語。

鳩や鸚鵡や^{アンダリフ}夜鶯は取った、

花園に住む者は皆私の嘆き方を盗み取った。

蠟燭よ、涙となって蛾の目から滴り落ちよ¹⁾。

私は苦悩に呻吟し、私の物語は悲嘆に満ちている。

神よ、この世に一体どんな楽しみがあるとおっしゃるのです？

永遠の生命もなく、死もまたないというのに。

私だけの涙ではない、これは花園全体の涙。

私は花。他の花の秋が私の秋。

「この悲しみの館で鈴となって過ごしてきた。

高鳴る胸のために叫びは声とならない²⁾」

この世の庭園で、楽しげな宴とは一切縁がない。

幸福の方が憐れんで涙を流すほど幸福とは縁がない。

私の不運を口が嘆いている。

私は口許にたゆたい、聞く耳を恥ずかしがる^{こと}言の葉。

私は散乱した一握りの土。しかし一向に分らない、

私はアレキサンダーなのか、鏡なのか、それとも埃なのか³⁾。

いずれも本当だ。しかし私の存在は自然の目的。

私は暗闇。その本質は光。

私は一握りの荒野の土が隠した財宝。

どこにあり、誰のものか知る者がいようか？
広い世界を見て回る必要はない。

私は小宇宙、私自身がひとつの世界。
酒でも酌人^{サーキー}でもない、酩酊でもなく酒杯でもない。

私は存在の酒場の万物の本質。
心の鏡はふたつの世界⁴⁾の秘密を映し出す。
見たままを私は口に出す。

華麗な言葉の使い手たちの中で私に与えられた言葉は

天上の鳥も私の仲間となるほどのもの。

荒れ狂う狂気によって

心の鏡は運命の秘密を知る。

インドよ！ おまえの姿は私を嘆かせる。

おまえの話ほど恐ろしい話は他にはない。

泣くことが私に与えられたすべてであるかのようだ。

天命により私はおまえの哀悼者となった。

花を摘む者よ、この花園に花びら一枚残してはならぬ！

幸運にも庭番は互いに争っている⁵⁾。

天はふところに雷を隠し持っている。

花園の夜鶯^{アンダリブ}たちよ、巣の中で無為に日を過ごしているときではない。

愚か者よ、私の叫びを聞け。これは

花園の鳥たちが毎日唱えていることなのだ。

うつけ者よ、祖国のことを考えよ！ 災難がふりかかろうとしている。

天上ではおまえを滅ぼす相談が行なわれているのだ。

現在と未来に目を向けよ。

昔の話を蒸し返して何になる？

いつまで沈黙しているのか？ 不平を言う気概を持て！

身は地上にあらうとも、声を天に響き渡らせよ！

インドの民よ！ 目を開かずにおれば滅びるしかない。

おまえたちのことなど史書から消え去ってしまうことだろう。

これこそ天の掟、天のきまり。

行動する者こそ天に愛される者。

今日、今まで秘めていた傷を晒すことにする。

血涙をしぼって世界を薔薇園にしてしまうことにする。
内に秘めた炎であらゆる心の蠟燭に火を点じ
おまえの漆黒の夜を明るく照らしてやろう。
痛みを知る心が蕾となって生まれ出るように
花園にこの一握りの土を撒き散らすことにする⁶⁾。
飛び散った数珠玉を一本の糸に通すことが難しくとも
この困難を克服せずにはおかないつもりだ。
友よ！ 胸を抉るのを止めたりしないでもらいたい。
愛の印を見せずにはおれないのだから。
この目が見たものを世界に見せよう。
おまえにも大きな驚きを与えてやろう。
隠れていようと鋭い眼光から逃れることはできない。
時代が何を必要とするか、それはすっかり見抜いているのだ。

おまえは自分の心に飛翔する喜びを教えようとはしなかった。
おまえはずっと足跡のように低きに甘んじてきた。
自分の世界にだけ心を寄せ
目を外に向けて驚こうとはしなかった。
美女の^{あですがた}艶姿に心を捧げはしたが
心の鏡の中に自分の美しさを見ようとはしなかった。
愚か者よ、偏見を捨てよ！ 世界という鏡の間に^ま
映っているのはおまえの姿。おまえはそれを敵視しているけれども。
この世の不正に対する激しい抗議の声となれ！
おまえは芸香のように声を縛りつけているけれども⁷⁾。
清浄な心を関係という染料で飾って何になる。
おまえは愚かにも鏡一面に指甲花^{へっしな}⁸⁾を塗りたくった！
天も地もおまえの藐睨みを嘆いている。
何たることか、おまえはコーランの聖句を十字にしまった！
口先だけで神の^{タウヒト}唯一性を唱えて何になる！
おまえは妄想の偶像を神に仕立てたに過ぎない。
おまえは井戸の中のヨセフに一体何を見たのか⁹⁾。
愚かにもおまえは普遍的なものを特殊化してしまった！
壇上で雄弁をふるいたいと思ってはいるが
おまえの説教はただの作り話。

自分の濡れた目に世界を焦がす美を見せてやれ.

蛾を駆り立て、露を泣かせるあの美しさを.

欲望に囚われた者よ、物を見ることだけがその目的ではない.

誰かが何らかの意図をもって人間の目を作ったのだ.

全世界を見たとはいえ

ジャムシード王は酒杯の中に自分の本質を見ることができなかった¹⁰⁹.

仲間割れは木、生るのは偏見の果実.

これこそアダムを天国から追い出す果実.

太陽の引力では花びら一枚動かなかった.

露を引き上げるのは立ち上ぼうとする意欲.

愛の傷を負った者は薬を探し求めたりはしない.

この負傷者は包帯を自分で作り出す.

愛の火花で心は光に溢れ

小さな種からシナイの花園が生まれ出る¹¹⁰.

意欲の剣に切られたままでいること、これがあらゆる苦しみ¹¹¹の薬.

その傷を縫い合わせたりしないこと、それが傷の治療.

没我の酒で私は天高く舞い上がる.

色の区別をやめ、私は芳香となることを学んだ¹¹².

祖国を憂えるこの目に涙の涸れることがあろうか.

詩人の目の勤行^{つとめ}とは常に涙に清められること.

薔薇の枝にどうして巣を作ることができようか.

ああ、恥辱しかない花園にどうして住めようか.

おまえは悟るだろう、自由は愛の中にあるということ.

仲間割れは隷属だということを.

自恃の心があるからこそ水中でも酒杯を伏せておけるのだ.

おまえも小川の泡のようにならねばならない¹¹³.

同胞に無関心であってはならない。これこそおまえのためになること.

おお、無関心に過ごしてきた者たちよ、この世界で暮らしたいのならば.

人類愛は魂を育む美酒.

それは私に酒杯なしで酔うことを教えてくれた.

愛によってのみ病める民族は癒され

その眠れる運命を目覚めさせた.

愛の荒野は異郷の砂漠であり祖国である.

この荒野は鳥籠であり巣であり花園である。
愛は目的地。それ自体が目的地であり砂漠である。
鈴であり隊商である。案内人であり盗賊である¹⁴⁾。
愛は病^{やまい}だと人は言う。しかしこの病^{やまい}には
逆運の妙薬が潜んでいる。
心を燃え上がらせることは光に満ち溢れること。
炎となった蛾は宴の灯火^{ともしび}である。
美は唯一無二。しかしあらゆる物の中に見ることができる。
それは美女シーリーンであり、ビーストゥーン山であり、山を穿った男である¹⁵⁾。
信仰と戒律の相違が諸民族を滅ぼした。
わが同胞の心には祖国を思う気持ちが少しでもあるのだろうか？
痛苦の物語はあまりに長く、もはや口を閉ざすとき。
口には舌も話す元気もあるけれど。
「想念の流れはとめどなく続き、私は口をつぐんだ。
物語には際限がなく、私は沈黙によって語った¹⁶⁾」

インドの歌

我らのインドは世界で一番。
我らは夜鷺^{ブルブル}、ここは花園。
異郷にあるとも心は祖国に。
心とともに我らも残る。
天まで届く世界一の山。
それは我らの守護者、我らの防人。
ふもとを流れる何千もの小川。
おかげで天国も羨む我らの花園。
ガンジス川よ、覚えてるか
我らの隊商が岸を下ったときのことを。
憎しみ合えと宗教は教えていない。
我らはインドの民、インドは我らが祖国。
ギリシア、エジプト、ローマは滅んだが
我らの名としるしは今もある。
我らが滅びなかったのには何か訣がある、
天は長年我らの敵であったのに。
イクバルよ、この世に親友は一人もいない。

胸に秘めた我らの苦しみを一体誰が知ろう。

新しい寺

ブラフマンよ！ 気を悪くしないなら本当のことを言ってやろう、

おまえの寺の偶像は古くさくなってしまった、と。

おまえは仲間に敵意を抱くことを偶像から学び

神はイスラームの説教者に争うことを教えた。

愛想を尽かして私は寺もモスクも捨てた。

イスラーム説教者の説教もおまえの説教も聞くのをやめた。

石の偶像に神が宿るとおまえは信じるが

私の目には祖国の土一粒一粒が神聖に見える。

さあ、今一度よそよそしさのヴェールを取り払おう。

離れ合っている者を結びつけ、二元の印を取り除こう。

心の街は荒れ果てたままだ。

さあ、この国に新しい寺を建てよう。

世界のどの聖地よりも高い所に聖地を作り

尖頂を天に届かせよう。

毎朝甘美な真言を唱え

礼拝する者みんなに愛の美酒を飲ませよう。

信者の歌には力がある、安らぎがある。

地上に住む者の救いは愛の中にある。

ムスリムの歌

中国もアラビアも我らのもの、インドも我らのもの。

我らはムスリム、全世界が我らの祖国。

我らは神の唯一性^{タウヒード}の教えを胸に懐く。

我らの名としるしを消し去るのは容易ではない。

偶像寺院に満ちた世界に初めて出現した神の家¹⁾。

我らはそれを守る。それは我らを守る。

剣のもとで我らは育った。

新月の短刀が我らのしるし。

祈りの開始を告げる声が西欧の谷間にこだまし、

何者も奔流となった我らを押し止めることができなかった。

天よ、我らは虚偽に打ち負かされたりはしない。
百度もおまえは我らを試みたけれども。
アンダルシアの花園よ！ 覚えているか
おまえの枝に我らの巢があった日のことを。
チグリス川の波よ！ おまえも我らを知っている。
今でもおまえの川は我らの語り手。
聖なる土地よ²⁹！ おまえの名誉のために我らは命を捧げた。
今なおおまえの血管には我らの血が流れている。
隊商の指揮者はヒジャーズの長³⁰。
その名によって我らの心は休らぎを覚える。
イクバールの歌は出発の合図。
我らの隊商は再び進み行く。

ナショナリズム（ひとつの政治概念としての祖国）

今や酒も酒杯もジャムシード王も一変した。
酌人^{サーキー}は好意と悪意の新たな方法を編み出した。
ムスリムもまた新しい聖地を建設し、
近代文明のアーザル¹⁾は新しい偶像を彫らせた。
これら新しい神々の中で最大のものは祖国。
その衣は宗教を葬る経帷子。

新しい文明が彫ったこの偶像は
預言者の宗教の家を荒らしている。
おまえの腕は一神論^{クウヘード}の力で強固。
イスラームがおまえの国、おまえは預言者マホメットに従う者。
この時代に昔の光景を見せてやれ。
おお、ムスリムよ、この偶像を泥まみれにしようのだ。

場所に囚われれば結果は滅亡。
祖国に縛られぬ大海の魚となれ。
祖国を捨てることは神が愛で給いし者の言行²⁾。
おまえも預言者の正しさを証言せよ。
政治家が口にする祖国と
預言者が教え給うた祖国とは全くの別物³⁾。

このために世界の諸民族は対立し、
交易の目的は征服となった。
政治には正義がなく、
弱者の家は荒らされる。
神の被造物たる人類はさまざまな民族に分裂し、
イスラームの統一の理念は根元から切断される⁴⁾。

蠟燭と詩人（1912年2月）

詩人¹⁾

昨夜荒れ果てた我が家の蠟燭に言った。
おまえの巻毛にとって蛾の羽は櫛、と²⁾。
この世界で私は荒野に輝くチューリップの灯火^{ともしび}のようなもの。
宴にも家にも縁がない。
長い間おまえのように我が身を燃やしてきたが
私の炎の周囲を回ろうとした蛾は一匹もない。
見果てぬ夢を追い求めた我が心に百もの光が蠢いているのに
この宴には目覚めた風狂の心はひとつもない³⁾。
一体どこでそのような世界を照らす火を手に入れたのか？
取るに足らぬ蛾にすらモーセの熱情をおまえは教えた！

蠟燭

息の波動は私にとっては死の知らせ。
おまえの唇は息の波動で歌を歌う。
私が燃えるのは燃焼するのが私の天性だから。
おまえは蛾を引き寄せようとして輝く。
私が泣くのは心の中を涙の嵐が吹き荒れているから。
おまえが露を散らすのは花園で評判になるため。
私が流した夜の血で私の朝は薔薇の裳裾。
おまえの明日はおまえの今日とは無関係。
おまえは輝いてはいるが心に炎がない。
荒野に輝くチューリップの灯火^{ともしび}のようなもの。
考えてみよ、^{サーキー}酌人と呼ばれることが自分にふさわしいかどうか。
人々は酒を欲しがっているのにおまえの酒杯にも酒がない。

おまえの方法は人々の方法とは別物.

おまえの醜さのためにおまえの鏡は評判を落とす.

カアバを脇にしながら偶像寺院に恋い焦がれるとは

何たる錯乱ぶりか、無分別なおまえの心！

おまえの世界にカイスなど生まれるはずがない.

おまえの荒野は狭く、駕籠の中にライラーの姿はない⁴⁾.

光り輝く真珠よ、波に抱かれて育った真珠よ！

おまえの海は嵐の飲びを知らない.

今頃歌って何になる？ 花園は荒れ果ててしまった！

空しく響くおまえの歌声.

具眼の士はいなくなってしまった.

今さら姿を見せると約束して何になる.

宴の席から火酒を好む者たちが消えた.

酌人^{サーキー}よ！ 今頃火酒の入った酒杯を持って来て一体何になる.

ああ！ 花園が荒れ果てた今

花のもとに風が春の訪れを知らせに來たところで何になる.

一晚中待ち続けた男の身悶えは見物^{みもの}だった.

明け方になって屋上に姿を見せて何になる.

すべての蛾の目標であった炎は消えてしまった.

今頃身を焦がしてやって來たところで何になる.

花は無関心、おまえが歌おうと黙ろうと.

隊商は無頓着、出発の合図があろうとなかろうと.

宴の蠟燭であっても炎を持たないならば

おまえの蛾もまた炎の飲びを知ることはない.

友愛の糸に結び合わせることができたのに

おまえの数珠玉は何故散乱しているのか？

結果を恐れぬ意欲も天翔ける思考もなくなった.

おまえの宴には狂人も賢人もいない.

心を燃え立たせる炎もなく、炎に飛び込む意欲もないのに

蠟燭の周囲に蛾がいたところで何になる？

おまえが酌人^{サーキー}であるとしても、一体誰に飲ませようというのか？

もう酒を飲む者はいないし酒を飲ませる所もない！

かの酌人^{サーキー}を思い出して割れた酒壺が泣き濡れる今日。

その酒杯が人の間を回っていたのはつい昨日のこと⁸⁹！

今、狂気の生育つ荒野は静か。そこには

踊るライターとライターを愛する者たちがいたのだが。

ああ、隊商の荷がなくなってしまった。

隊商の心から損失の感覚すらなくなってしまった。

人々の活動によって荒野は活気づいていたのに

町は滅び、跡形もない。

一神論^{タウヒード}の栄光を支えた祈りの声は

インドではブラフマンへの供物となった。

聖法の遵守こそこの世で永遠の喜びを得る道。

波にとって自由は悲嘆のもととなった⁸⁹。

見られようとしての顕現であったのに

人々は谷川の右岸の光⁷⁹に希望を持たないようになった！

花園を飛びかっていた数千もの夜鶯^{フルフル}は

どうして巣にこもるようになってしまったのか？

空一面に光り輝き目を眩ませていたのに

稲妻は今や穀倉の片隅でくつろいでいる。

血涙をしぼる目がどうして花園の世話になろうか？

とめどない涙で目のまわりに薔薇が咲き乱れているというのに。

しかし悲嘆の夕刻は祝祭^{イーデ}の朝の訪れを告げている。

夜の暗闇にも一条の希望の光が差している！

ヒジャーズの酒場で酒杯を手をしている者よ！ よい知らせだ。

やっとおまえの仲間が目を覚ました。

自尊心と引換えに外国の酒が買われたが

またおまえの店が繁昌するようになった。

インドの月のように美しい者たち⁸⁹の魔法が解けようとしている。

再びスライマー⁹⁹の目が情熱をかき立てている。

「酌人^{サーキー}よ、国産の酒を持って来い」と再び人々が言うようになった。

「西欧の酒は心の熱狂を静めてしまった」

さあ、歌え。沈黙のときではない。

東雲^{しのめ}の空が太陽の酒壺を担いでいる。

他人の悲しみに胸を痛めよ。周囲の者にもそうさせよ。

私が述べたのは真理。耳があるなら聞くがよい¹⁰。

詩は預言の一部と言われている。

さあ、イスラーム共同体¹¹ に天使の言葉を聞かせてやるがよい！
素晴らしい光景を約束して目を開かせ
遅りすぐられた言葉の熱気で心を蘇らせるのだ。

おまえは安楽を求め勇気を失った。

荒野の大海も今や花園の小川。

本来の姿を保っていたとき、強固なる結合があった。

花を放れて芳香の隊商は散り散りとなった。

水滴の生涯は生の秘密を悟らせる

真珠、夜露、涙となって¹²。

どうにかして心を生み出せ。これは大きな財産だ。

心を欠いた人生など何になる。

イスラーム共同体が結合を保っていたとき、おまえには名誉があった。

結合が消え去り、おまえは世界の笑い者となった。

個人は共同体とともにあり、一人では何者でもない。

川があつての波であり、川の外では何物でもない。

心の奥に愛をまだ隠しておくのだ。

酒壺のように酒の評判を落としてはならない。

モーセのようにシナイの谷に天幕を張り

探求の炎で家を焼くがよい¹³。

蠟燭もまた迫害の結末を知るように

灰となった蛾で夜明けを形作るのだ¹⁴。

自尊心があるなら酌人^{サーキー}の世話になつてはならぬ。

水中の泡のように酒杯を伏せておくがよい。

昔ながらの山や荒野にはもう面白味がない。

おまえの狂気は目新しい。さあ、新たな荒野を生み出すがよい。

運命がおまえを地中に埋めてしまったとしても

種子のように芽を出し、生長するがよい。

さあ！ 昔の枝にまた巣を作るのだ。

花園に住む者たちを歌で陶醉させるのだ。

この花園では夜鶯^{フルフル}の門弟となるか薔薇の弟子となるかしかない。

不平を並べるか一言も言わずにいるかしかない。

何故おまえはこの花園で露のように沈黙しているのか？

口を開くのだ。おまえは世界の楽器が奏でる調べ。／

自分の本質を悟れ、農民よ。／

おまえは種子であり畑である。雨であり収穫物である。

ああ。／ 何がおまえをさ迷わせているのか。

おまえは道であり旅行者である。道案内であり目的地である。

何故嵐を恐れておまえの心は震えるのか。

おまえは船頭であり海である。舟であり岸である。

激しい恋慕の街を覗いてみよ。／

おまえはカイスでありライラーである。荒野であり駕籠である。

何と思ふことだ。／ おまえは酌人^{サ-キ-}を必要とするようになってしまった。

おまえは酒であり酒壺である。酌人^{サ-キ-}であり酒宴である。

炎となって神以外の雑草を焼き払うのだ。

何故悪を恐れるのか。おまえは悪の破壊者だというのに。

無知な者よ。／ おまえは時の鏡の輝き。

おまえはこの世界で神の最後の言葉。／

自分の本質を知れ、愚か者よ。

雲に見えてもおまえは無限の大海。／

何故おまえは劣等感の虜となっているのか。

見よ、おまえは嵐の猛威を孕んでいる。／

おまえの胸はあの御方の貴重な御言葉を保管している。

その御姿は現世の秩序の中に見えも隠れもする。

全世界をも武器なしで征服できる手段を

手中にしているにおまえは気づいていない。／

ファーレーンの山の沈黙が今まで見守ってきた誓約を

おお、愚か者よ。／ おまえは覚えているか¹⁵⁾？

愚かにもおまえはわずかな蕾に満足してしまった。

花園には場所の狭さを直す方法があるというのに。／

胸の内が言葉の銀幕に映し出される。

酒壺の衣を通して酒が透けて見える。／

燃え盛る私の歌声は私を燃やし尽くした。

この歌声こそわが人生の全財産！

この燃え立つ歌声の秘密をわが胸に尋ねるがよい。

運命の輝きをわが心の鏡に見るがよい！

空は朝日を受けて鏡の衣を纏い

夜の暗闇は水銀玉のように転げ去るだろう！

春風は歌声を生み出すことだろう。

蕾の中に眠る芳香すら歌声となるだろう！

花園で胸の張り裂けるような思いをしている者たちは同じ境遇の者たちと相交わり

^{そよかぜ}微風は花々の親友となるだろう¹⁶⁾！

私が流す露は熱情を生み出し

この花園の蕾すべてが^{なきけころ}情心を持つようになるだろう！

川の雄大な流れの結末を見るがよい。

荒れ狂う波こそその足枷となるだろう¹⁷⁾！

再び心は礼拝の教えを思い出し

額は聖地の土を知ることだろう！

獵師は嘆き、鳥は歌う。

花を手折る者の血によって蕾は真紅の衣を纏うことになるだろう！

目にしていることを口にするのは不可能だ。

世界がどうなるのか驚くばかり！！

太陽の輝きで結局夜は消え去ることだろう！

この花園は一^{タウヒード}神論の歌声に満ち溢れることだろう！！

イスラームの夜明け

星の輝きが薄らぐのは明るい朝のしるし。

地平線より太陽が出、深き眠りの時は去る！

東洋の死せる血管に生命の血が回り出す。

この秘密をスィーナーやファーラービーは悟れない¹⁾！

ムスリムをムスリムとしたのは西欧の嵐。

荒波に揉まれてこそ真珠は妖しく輝く。

ムスリムは再び神より授かるようとしている、

トルコ人の栄華を、インド人の知性を、アラブ人の雄弁を。

未だ蕾が夢見心地でいるならば、おお、^{ブルブル}夜鶯よ、

「もっと大きな声を出せ。歌への関心が失せようとしているから²⁹」
身を震わせよ、花園にしようと巣の中にしようと思つていようと。

水銀から活動性は切り放せない。
慧眼な者がどうして馬の鎧飾りなどに気をとられようか、
勇者の雄々しさが目に入るというのに！
チューリップの心に意欲の灯をともし
花園のあらゆる物を熱心な探求者とするのだ。

ムスリムの泣き濡れた目に春の雲が現われ
神の友アブラハムの海に再び真珠が生まれ出る。
イスラームの共同体の書物は再び堅牢に製本され
ハーシム³⁰の枝は再び葉と実をつけようとしている！
あのシーラーズのトルコ人はタブリーズとカーブルの心をしっかり握んだ³¹。
^{そよかぜ}微風は花の芳香を旅の道連れとする！
トルコ人の上に悲嘆の山が崩れ寄せようとも
幾十万の星が血を流してこそ朝は来る！
世界を統治するより世界を見ることの方が難しい。
心が血に染まってこそ心眼が開く！
数千年というもの水仙は自分の輝きのなさを嘆き続けてきた。
花園には具眼の士はめったに生まれない！
歌い続けよ夜鶯^{フルフル}。おまえの歌声で
鳩の弱々しい体の中に鷹の心が生まれるように！
おまえの胸中に秘められた生の秘密を告げるのだ。
ムスリムに熱烈な生の物語を語ってやるのだ。

おまえは不滅の神の全能の手、そして舌。
信仰を持て、愚か者よ、疑念に身を任せるとは。
ムスリムの目的地は蒼穹の彼方。
おまえは星を舞い上げて進む隊商！
この世も人も滅びるがおまえは不滅。
おまえは神の最後の言葉。おまえは永遠！
おまえの心が流す血はチューリップの花嫁の婚礼化粧⁵³。
おまえはアブラハムの系統に属す。おまえは世界の建設者⁶⁰！
おまえには生の可能性が委ねられている。

おまえはこの世に秘められた宝石の鑑定者！
この物質の世界から久遠の世界のために
預言者がお持ちになった贈物、それがおまえ！
イスラーム共同体の歴史は教える
おまえがアジア諸民族の守護者であることを。
再度学べ、真理を、正義を、勇気を。
おまえは世界の指導者となるだろう！

自然の目的、ムスリムたることの真髄。
それは友愛の世界統治、愛の横溢！
色や血の偶像を破壊しイスラーム共同体に身を委ねよ。
トルコ人もイラン人もアフガン人もありはしない！
花園の鳥に交じって枝にいつまでとまっているつもりなのか。
おまえの翼はクヒスターン⁷⁾の鷹のような飛翔力を秘めている！
疑念に満ちた世界の中で、ムスリムの信仰は
荒野の漆黒の夜に輝く隠者の^{ともしび}灯火！
ローマ皇帝とイラン国王の専制を倒したものの、
それは何であったか？ ハイダルの剛力、ブー・ザルの清貧、サルマーンの高徳⁸⁾！
イスラーム共同体の自由の民⁹⁾は何と華々しく現われたことか。
数世紀来の囚人たちは戸の裂け目から覗き見る！
この世における生の安定は不動の信仰によって得られる。
だからこそドイツ人よりトルコ人は強かった。
この燃え立つ土塊に信仰が生まれると
それは忠実なる精霊ガブリエルの翼を生み出すことだろう！

奴隸の身にあっては剣も策略も無益。
力強い信仰が生まれれば鎖は断ち切れる。
一体誰に分ろうか、その腕の力。
ムスリムの一睨みで運命は一変する！
聖者の位、王座、森羅万象の知識。
これらは一体何か？ 信仰の一点を注釈しただけのもの！
しかしアブラハムのような慧眼の士はそう簡単には生まれない。
欲望がこっそりと胸の中に幻影を作り出す！
主従の区別が人間の争いの種。

用心せよ。抑圧者よ。天の罰は厳しいから。/
土でできていようと光でできていようと万物の本質はひとつ。
原子の心臓を切り裂けば太陽の血が滴ることだろう。
確固たる信仰、不断の努力、世界を覆う愛。
生の闘争においてこれこそ信者の剣。
信者に必要なものは何か。気高い精神。潔癖な性格。
燃える心。清らかな目。奮い立つ命¹⁰⁾。/

鷲のように襲いかかった者たちは尾羽打ち枯らし
シリアの星は夕焼けの血に染まって現われた¹¹⁾。/
海底を泳いでいた者たちは海に葬られ
波の平手打ちを食らっていた者たちは真珠となった。/
錬金術を誇っていた者たちは道の埃となり
額づいていた者たちは錬金術師となった。/
我々の足の遅い使者は生の言葉をもたらし
電波によって情報を得ていた者たちは何も知らないままであった。/
聖地は辱められた、聖地の長が愚かであったために¹²⁾。
トルコの若者たちは何と賢明であったことか。/
大地に向かって天翔る光¹³⁾ が言った。
この土塊¹⁴⁾の方がはるかに生き生きとしており、頑丈で光り輝いている、と。/
この世界を信仰を持つ者は太陽のように生きる。
沈んでも再び顔を出す。/
諸個人の信仰こそイスラーム共同体建設の資本。
これこそ共同体の運命を切り拓いていく力。/

おまえは世界の秘密。自分の目に姿を見せるのだ。
自我の秘密を知り、神の通訳となれ。
食欲が人類を分断してしまった。
友愛の物語となれ。愛の言葉となれ。
インド人がおりホラーサーン人がいる。アフガン人がおりトルコ人がいる。
おお、岸に縋る者よ。跳ねて無限の大海となれ。
おまえの翼は色や人種の埃で汚れている。
おお、聖地の鳥よ。飛ぶ前に埃を落とすのだ。
自我の中に潜り込め、愚か者よ、これが生の秘密。

朝夕の循環から抜け出し、永遠となれ。
人生の戦場においては鋼鉄の性質を生み出し
愛の寝室においては絹の衣となれ。
山や荒野を奔流となって通り過ぎ
花園に出会ったら歌う小川となれ。
おまえの知識と愛には限界がない。
自然の楽器にはおまえ以上の音はない。／

今だに人は専制の衰れな虜。
人が人を獲物にするとは何たることか。／
現代文明の輝きは目を眩ませる。
しかしそれは偽の宝石を巧妙にちりばめただけのもの。／
西欧の学者たちが誇りにしていた学識は
食欲の血まみれの手に握られた戦^{いくさ}の剣。／
未来予知の魔力によっても安定することはない、
その文明の土台が資本主義であれば。
行動次第で人生は天国にも地獄にもなる。
この土塊は本来光でも火でもない¹⁵⁾。
^{ブルブル}夜鶯に歌を教え、^{ほど}蕾の結び目を解くのだ。
おまえはこの花園の春風なのだから。
再びアジアの心に愛がきらめき
大地を繻子の衣を纏ったトルコ人が駆け巡っている。／
さあ来るのだ。弱々しい命の買い手が現われた。
「やっと隊商が我々の側を通りかかった¹⁶⁾」

来たれ^{サーキー}酌人、枝の間から鳥のさえずりが聞こえた。
春が来て恋人が来た。恋人が来て心が安らいだ。／
春の雲は谷と荒野に天幕を張り
滝の轟きが山の頂から聞こえてきた。／
おまえに身を捧げよう、^{サーキー}酌人よ。おまえは昔の楽器を取り出すがよい。
歌手の一行が続々とやって来たから。／
隠者の許を離れ、遠慮なく杯を重ねよ。
やっといつもの枝から^{ブルブル}夜鶯の歌声が聞こえてきた。／
熱心な者たちにバドルとフナインの覇者¹⁷⁾ の話をしてやるがよい。

その者の不思議な力は私の目には明らか！
神の友アブラハムの枝は我々の血によって蘇ろうとしている。
愛の市場で我々の金貨は本物と判明した！
私は殉教者の墓にチューリップの花びらを撒く。
その血はイスラーム共同体の木を育てたから！
「さあ、花を撒き散らそう。酒をつごう。
天を切り裂き、新たな世界を築き上げよう¹⁸⁾」

註

苦しみの姿

- 1) 蠟燭はインド、蛾はイクバル自身を指す。
- 2) この対句はペルシア語。一対句は二半句で構成され、訳文では半句が一行である。
- 3) イスラームでは人間は土から創造されたことになっている。また、アレクサンダーを鏡の発明者とする伝説がある。
- 4) この世とあの世。
- 5) 花を摘む者はイギリス、花園はインド、庭番はインド人を指す。
- 6) インドに身を捧げるということ。
- 7) 芸香 (sipand) は邪視を祓うために焚かれるが、火にくべると音を立てる。
- 8) 指甲花 (hinna) は手足や頭髪を染めるのに使われる染料。
- 9) ヨセフは兄たちに妬まれ、井戸に放り込まれた。『コーラン』ヨセフの章及び『旧約聖書』創世記第37章参照。
- 10) ジャムシード (Jamshīd) は古代イランの伝説上の王で、世界の様子を映し出す酒杯を所有していたと言われている。
- 11) シナイ山でモーセが神に会ったことを踏まえて愛の重要性を強調している。『コーラン』胸壁の章及び『旧約聖書』出エジプト記第24章参照。
- 12) 芳香が無色であるように、色すなわち特定の集団に縛られることがなくなったということ。
- 13) 泡を伏せられた酒杯に譬えている。
- 14) 愛は苦しみや喜びを与えるが、大事なのは愛するという行為そのものであるということ。尚、隊商の駱駝は鈴をつけている。
- 15) シーリーン (Shīrīn) と山を穿った男すなわちファルハド (Farhād) はイランの恋愛物語に登場する人物。ビーストゥーン (Bīstūn ウルドゥー語では Bēsātūn と発音する) はイラン西部の山。
- 16) この対句はペルシア語。

ムスリムの歌

- 1) カアバの神殿のこと。
- 2) 聖地メッカのあるヒジャーズ地方のこと。
- 3) マホメット (正しくはムハンマド Muḥammad) のこと。

ナショナリズム (ひとつの政治概念としての祖国)

- 1) アーザル (Ādhar) はアブラハムの父親で偶像崇拝者。
- 2) マホメットがメッカからメディナに移住したことを指す。

- 3) イクバルは、祖国愛自体は人間の自然な感情であり、ムスリムの信仰の一要素をなすと考えていた。
Sayyid ‘Abd al-Wahid Mu‘inī, ed., *Maqālāt-e Iqbal*, Lahore, 1963, p.223 及び A. R. Tariq, ed., *Speeches and Statements of Iqbal*, Lahore, 1973, p.136 を参照。
- 4) 原文 *Qaumiyat-e Islām kī jar kaffī hai is se*.

蠟燭と詩人

- 1) 詩人の部分はすべてペルシア語。
- 2) 櫛が巻毛を整えるように蛾が蠟燭を飾り立てているということ。つまり、蠟燭の周囲には常に蛾がいるということ。
- 3) 理解者が一人もいないということ。
- 4) カイス (Qais) とライラー (Lailā) は有名な悲恋物語の登場人物。カイスは美女ライラーを恋するあまり狂人となり、荒野をさました。このためカイスはマジュヌーン (Majnūn 狂人の意) とも呼ばれる。
- 5) 酌人はムスリム、酒壺はイクバル自身を指す。
- 6) 波の音が嘆きの声のように聞こえるのでこのような表現をしている。
- 7) 神の光を意味する。『コーラン』物語りの章参照。
- 8) インド文明ともイギリスとも解釈できる。
- 9) スライマー (Sulaimā ウルドゥー語では Salimā) はアラブ詩のヒロイン。ここではイスラームを意味する。
- 10) この対句はペルシア語。
- 11) *millat* を本稿では「イスラーム共同体」あるいは単に「共同体」と訳した。
- 12) どのような境遇にあっても果たすべき義務を忘れてはならないということ。
- 13) シナイ山で神に会ったモーセが預言者として活躍したことを踏まえてムスリムに行動を呼びかけている。『コーラン』ターハーの章及び『旧約聖書』出エジプト記第19章参照。
- 14) 蠟燭はムスリムの敵、蛾は殉教者を意味する。
- 15) ファーラーンの山 (*koh-e Fārān*) はメッカの山を意味する。イスラームを覚えているか、ということ。
- 16) ムスリムは団結するだろうということ。
- 17) 西欧列強は結局滅亡するだろうということ。

イスラームの夜明け

- 1) イブン・スィナー (Ibn Sīnā, Abū ‘Alī al-Ḥusain b. ‘Abd Allāh, 980~1037) とファーラービー (al-Fārābī, Abū Naṣr Muḥammad b. Muḥammad, 870頃~950) は哲学者として有名。
- 2) この半句はペルシア語。
- 3) マホメットはクライシュ族のハシミ家に生まれた。
- 4) この半句はペルシア語。「シーラーズのトルコ人」という言葉は、ハーフィズ (Ḥafīz, Shams al-Dīn Muḥammad, 1326頃~1390頃) の有名なガザルの中に見られるが、ここではムスタファ・ケマル (Mustafa Kemal, 1881~1938) を指す。彼を指導者とするトルコ人の英雄的な働きが、イラン、アフガニスタンをはじめとするイスラーム世界に大きな影響を及ぼしたということ。
- 5) おまえの努力によって世界は輝くということ。
- 6) アブラハムはカアバの建設者と考えられている。
- 7) クヒスターン (Qūhistān) はイランのホラーサーン地方の地名。
- 8) ハイダル (Ḥaidar) は第4代カリフとなったアリー (‘Alī) のこと。ブー・ザル (Bū Dhar) つまりアブー・ザッル (Abū Dharr Ghifārī) とサルマーン (Salmān Fārsī) は初期の有名なムスリム。
- 9) トルコ人のこと。
- 10) この対句はペルシア語。

- 11) ドイツあるいはギリシアとトルコとの比較.
- 12) 1916年, メッカ知事フサイン (Husain b. 'Ali, 1852頃~1931) はオスマン・トルコに対して反乱を起こした.
- 13) 天使のこと.
- 14) トルコ人のこと.
- 15) 人間の本性は善でも悪でもないということ.
- 16) この対句はペルシア語
- 17) マホメットのこと. バドルの戦い (624年) やフナインの戦い (630年) でマホメットの軍隊は大勝利を収めた.
- 18) 最終連はすべてペルシア語. 最後の対句はハーフィズのもの.